**市民参加がもたらす**

**新たな公園政策**

経済学部経済システム課程総合政策

松本桃子

**目次**

**はじめに**

**１章　公園の概要**

**1-1　公園とは**

**1-2　公園政策の変遷**

**２章　公園政策**

**2-1　公園政策の現状**

**2-2　具体例**

**2-3　なぜ市民参加（ワークショップ）による公園政策が必要なのか**

**３章　課題**

**3-1　公園政策の課題**

**3-2　今後の公園政策の提案**

**まとめ**

**参考文献**

**はじめに**

公園は生活しているうえで身近に存在し、子供から大人まで幅広い年代が利用する機会が多くある。公園には市街地の一角に子どもの遊具を設置し、遊び場として整備された児童公園や、動物・植物などを自然に近い状態で人に見せるための森林公園など様々な種類の公園があり、対象となる場所は目的に適ったように整備されている。

また最近、地球温暖化やヒートアイランド現象など様々な環境問題や、経済的繁栄のもとで多くの自然が失われているという現状がある。そのため、公園は元々の自然状態を保つことが優先される場合もある。

このように公園の目的には緑地化することがあり、公園らしさとは緑地というイメージが強くある。しかしその他にも、公園の役割として以下の項目がある。①都市を緑化し、都市景観の改善する　 ②公害の防除等を行い都市環境の向上を図る 　③空地を確保し、防災に資する 　④レクリエーションの用に供する⑤都市住民の情操の純化、健康の増進、教養の向上という５つの項目があげられている。今までは急速な都市化などによって、公園は都市の中で自然および空間が確保できているところとして重視されてきた。このため、公園の政策においても前の①～③のような公園そのものの環境や景観など公園の存在をより良くするという政策が重視されてきたように考えられる。しかし、少子高齢化社会のなかにおいて④、⑤についての政策が重視されるべきではないだろうか。また、これまではただ行政が植樹や公園整備などの公園政策をおこなってきたが、最近は市民参加型の公園整備が進んでいる。具体的には平成１１年に旧建設省が新規事業として「平成の森」づくり事業を実施して、大仙公園（大阪府）、びわこ地球市民の森（滋賀県）などの多くの公園で市民参加型の公園整備や政策が行われるようになった。今後の公園政策は、公園の存在をより良くするだけではなく、健康の増進や教養の向上など公園を活用する政策、また住民のニーズに応えるように市民参加（ワークショップ）を取り入れるなどの政策が必要なのではないかと考える。

以上述べてきたように本稿では、主に公園の中でも都市公園を具体例に挙げ、公園政策がどのように行われているのか具体例を挙げて考察していく。さらに、今後はどのような公園政策が求められていくのか、政策に市民参加は必要なのかということを述べていく。

**1章　公園の概要**

**1-1　公園とは**

そもそも、公園とは市街地などで木や草花などを植え、子供の遊ぶ場所を整えたりして作った公衆のためのいこいの場所や、自然のままの状態を保存し、レクリエーションの対象の場として定めた場所である。では、公園にはどのような価値があり、どのような存在意義があるのだろうか。まず、価値として次のことが考えられる。

一つ目は、公園の存在そのものに意義があり「存在価値」があるのではないだろうか。動物や植物など多くの生き物が存在し、豊かな自然や歴史的建造物などを保全したり、緑があるということで人々に安心感を与えたり、公園を実際に利用しなくても存在するだけで公園には意味があると考えられる。

二つ目は、実際に公園を利用することで初めて価値を生む「直接利用価値」である。公園に行くことで運動できたり、リフレッシュしたり、子供たちと楽しく過ごしたりと様々なレクリエーションが行える。また、環境教育などに用いられる場所としても活用でき、地域の方々が公園を中心とし様々な催しをすることもできる。さらに、これからの高齢化社会にともない公園を利用することで健康づくりに役立ち、公園を利用することで満足が得られる。

三つ目は経済的な効果、波及効果やにぎわいが期待できる「間接利用価値」が考えられる。公園で実際に入園料などを得て収益をあげることもあるが、公園の周辺や公園内に公共施設や商店街などがあると、公園と近隣施設につながりができ、公園を利用することで周りの施設にも経済的効果が見込まれ地域が活性化されるのではないだろうか。

四つ目は「教育価値」である。公園には豊かな自然が存在し、子どもたちが自然環境を学ぶ場として価値があると考えられる。また、公園の遊具の中には遊びながら力学を学べるものがあったり、さらに子どもたちだけでなくお年寄りまで年齢にかかわらず、人々が自然体験活動に参加できるようなプログラムなど生涯学習を推進している公園も存在している。

このような価値がある中で、公園の存在意義としてはどのようなことが考えられるだろうか。まず、地球環境問題のことである。平成１４年３月に新生物多様性国家戦略、平成１６年３月にヒートアイランド対策大綱、平成１７年４月には京都議定書目標達成計画などが決定されている。その中で政府も公園利用には積極的であり、地球温暖化対策、ヒートアイランド対策、生物多様性保全対策として、都市における公園緑地の確保が重要な課題として掲げられている。また、生物多様性保全には、自然の生態系と調和した公園緑地の整備・環境教育、環境学習の場の確保・創出などが求められるのではないだろうか。

次に、少子高齢化への対応である。公園で子どもたちは自然に親しみ、集団の中で体を動かして遊ぶことができ、公園は環境学習の場にもなる。また、高齢者は公園でウォーキングなどの運動をすることで健康維持につながり、地域の文化や地域住民とのふれあいの場など、人々が公園づくりに興味を持ち、高齢者の生活を豊かにする公園の整備・政策は課題であると考える。さらに、公園は地域づくりにもつながるのではないかと思う。公園は地域住民の人々にとって身近なものであり、イベントや市民参加型の植樹活動などを通して地域の人々の交流の場になる。

以上のような価値や存在意義がある中で行政は、時代とともに変化する公園に求めている役割をいかに把握し、どういう政策を進めていたのだろうか。時代背景とともに公園政策がどのように変遷していったのかをみていく。

**1-2　公園政策の変遷**

公園政策の変遷を戦後からみていくと、1956年に「都市公園法」が公布されている。戦中から戦後にかけ公園の喪失や廃墟化が目立ちはじめたため、施設基準や公園管理の基準などが整備された。そのため、この「都市公園法」は都市公園の管理を明確にすることに重点があった。その後、「都市公園法」は社会変化とともに改正されているが、1976年と1993年に大きく改定が行われた。1976年は大規模レクレーション需要への対応が目的とされ、1993年は児童の利用のみならず高齢者をはじめとする住民の利用を視野に入れ、コミュニティ形成の役割も期待された。

その後、昭和50年代になると戦後の公園政策に求められていた公園における管理の対策ではなく、「都市緑化」が求められるようになってきた。その対策として都市緑化の総合化を目指す「緑のマスタープラン」の策定が進められる。この時期の公園の役割としてはレクレーションが中心であり、緑化を進めることで都市の中に余暇できる場所や遊べる場所を人々に与えることを目的にしていたのではないだろうか。

このように近代的都市公園政策の歴史的変遷は、制度上において時代の社会的状況や社会的要請に対応してきた。しかし、時代の要請とともに対応してきたが、公園の基準を定め、整備し、緑化を進めるなどの背景には、制御できない災害などに備えるということが優先される場合も少なくなかった。そういう部分では時代に対応してきているが、それでは公園政策としては限界があり、また、市民の視点からしてみればまだまだ政策として不十分な部分が多くある。このままの政策では現代のような多様化した価値観とニーズには対応できなくなってしまう。行政だけによって提供される公の施設としての都市公園の機能的役割は終わっており、役割も大きく変化している。

今後は、都市の緑とオープンスペースの確保・充実・発展のための根幹として重要性が増してくる。都市公園の社会的機能は、市民参加を通じて地域のコミュニティや交流を形成し、連携して緑地保全、緑化、公園・緑地の整備・管理を進めていく過程として位置づけられる。行政は緑とオープンスペースの確保のために政策を提案し、実現を図り、地域コミュニティや交流を進めていくことが要求されてくる。

　公園政策の変遷をみてきたが、これまでの行政主導の政策では限界がきているということが分かった。これからは、市民参加の公園づくりが必要になってくるのではないだろうか。従来の施設としての都市公園は、誘致距離や面積、公園内施設の設置基準などの計画に基づいて設けられるものであったが、そこには利用者である市民の意見や視点は十分に考慮されていなかった。今後の公園政策には市民文化を公園づくりにいかに反映させていくかが課題である。（参考文献：都市公園政策形成史）

このように社会の変化とともに政策も変化していることが分かった。それとともに社会や市民のニーズや価値も変化しているのである。それらに対応していくために、今後は市民参加を政策に取り入れられるべきであると考える。では、現在の公園政策にはいったいどういうものがあるのかを次の章で確認していく。

**2章　公園政策**

**2-1　公園政策の現状**

　公園の価値や存在意義には教育価値や少子高齢化の対応、緑地の確保など様々なものがあり、公園政策もそれぞれの時代のニーズに合わせて変化してきたことは１章で述べてきた。では、現在の公園には緑地やオープンスペースの確保、地域コミュニティや交流の形成などが要求されている中で政策はどのようになっているのだろうか。

（１）防災公園としての整備

都市の防災機能の向上により安全で安心できる都市づくりを図るため、延焼防止・輻射熱のための植栽や消火用水・雑用水として水を活用できる池などの整備を行っている。

また、地震災害時に復旧・復興拠点や復旧のための生活物資等の中継基地等となる防災拠点、周辺地区からの避難者を収容し、市街地火災等から避難者の生命を保護する避難地等として機能する地域防災計画等に位置づけられる都市公園等について緊急的に整備を推進している。

（２）地球環境問題への対策

　地球温暖化の防止、ヒートアイランド現象の緩和、生物多様性の保全等における緑とオープンスペースの確保は、国家的な課題であり、それら課題に対応するため、各種計画等が国において取り決められている。公園・緑地分野においても、これらの計画等に沿って、地球温暖化対策・ヒートアイランド対策・生物多様性対策が行われている。

地球温暖化対策では緑政策大綱や緑の基本計画等に基づく緑化の推進と国民参加型の緑化運動の展開などを行う。ヒートアイランド対策では都市公園整備・民間建築物等の敷地・公共空間緑化の推進や水と緑のネットワークの形成の推進している。生物多様性対策は生物多様性を支える樹林地の確保や自然環境に配慮した公園緑地の配置・整備などを行っている。

（３）都市公園における遊具の管理

都市公園は子どもたちが多く利用するため安全を確保することは重要なことである。都市公園における遊び場の安全管理については、子どもの遊びの特性や遊具に係る事故等を踏まえ、関係者の共通認識の醸成を図るとともに、公園管理者において、必要な安全措置を講ずることが必要である。そのため、国土交通省では諸外国の遊び場や遊具の安全確保に関する指針や規格を参考として、わが国の都市公園における遊具の基本的な考え方を示した平成14年3月に「都市公園における遊具の安全確保に関する指針」を策定され、平成20年8月には改正版が策定されている。

（４）市民活動の取り組み

　都市公園は子どもから高齢者までの幅広い年齢層の自然とのふれあい、レクリエーション活動、健康運動、文化活動等多様な活動の拠点となっており、これからは公園の整備・管理や緑化活動へ、より一層市民が参加することが期待できる。そこで、市民参加の公園づくりの推進・健康運動活動の推進・生涯学習の推進・環境学習の推進などの政策が行われており、より都市公園を活用する政策になっているのではないだろうか。

（５）地域活性化への取り組み

　中心市街地のにぎわいの場となる公園・広場の整備や、地域の歴史的・自然的資源を活用した観光振興の拠点の形成などの、地域間の交流・連携の拠点となる緑とオープンスペースの確保は、快適で個性豊かな地域づくりに必要不可欠である。農作業の体験などを通じ自然とふれ合うことのできる公園づくりを行うことで自然的資源の活用をし、また、商業地域等におけるまちのにぎわいや、人々の往来の中心となる公園・緑地の整備を行うことで、公園と近隣施設とのつながりができ商店街などの中心市街地の活性化につながる政策なども行われている。

　（６）都市公園においてのユニバーサルデザインの取り入れ

　都市公園は高齢者、障害者を含む全ての人々が、緑豊かで安全、快適な生活環境の中で様々な体験活動を行う場であり、園路や主要施設などのバリアフリー化を進めるとともに、健康づくりや機能回復などの活動ができる公園の整備を推進している。また、国土交通省では、平成11年7月にはユニバーサルデザイン手法による都市公園の計画・設計指針である「みんなのための公園づくり～ユニバーサルデザイン手法による設計指針～」を取りまとめ、地方公共団体への周知を図っている。さらに、国営公園などにおいて、高齢者や障害者の利用を助け、公園の案内を行うボランティアの育成等の取り組みも行っている。

|  |  |  |  |  |  |  |
| --- | --- | --- | --- | --- | --- | --- |
| **『みんなのための公園づくり－ユニバーサルデザイン手法による設計指針』において示されている施設設計例**   |  |  |  | | --- | --- | --- | | ■車椅子使用児に配慮した遊具 （高低差を利用した遊具） |  | ■砂場 （車椅子使用児にも使いやすい形状のものを設ける） | | http://www.mlit.go.jp/crd/park/shisaku/ko_shisaku/kobetsu/img/kobetsu_c_2_5_01.jpg |  | http://www.mlit.go.jp/crd/park/shisaku/ko_shisaku/kobetsu/img/kobetsu_c_2_5_02.jpg | |

（出典：国土交通省　公園とみどり　個別施策）

このように市民参加の取り組みや地域活性化への取り組みも行われており、これまでのように、ただ行政が花や木を植えるのではなくて今後は市民参加ということがキーワードになってくる。ワークショップを政策に取り入れることで市民の意見を反映することができ、ユニバーサルデザインの取り入れも積極的になり、充実したものになるのではないだろうか。また、今後はワークショップなどの市民参加の取り組みをどのように行政と市民の間で実際に行い、その政策を維持していくかが重要になってくると考える。では、実際の公園ではどのような取り組みが行われているのだろうか。東京都の羽根木公園と福岡市の田村中央公園と三宅中央公園を具体例としてみていく。

**2-2　具体例（羽根木公園の場合）**

　　　　羽根木公園内には、羽根木プレーパーク・野球グラウンド・テニスコート・区立梅丘図書館・茶室「日月庵」などがあり、地域に個性や魅力をもたらす優れた歴史的・文化的資源を保存・承継・活用する公園の整備を推進している。また、羽根木公園内には茶室があるということから「雑居祭り」という行事を開催しており、子どもたちから大人まで様々な人々が茶道体験に気軽に参加でき、生涯学習も推進している。

　　　　さらに、羽根木公園では住民の意見を反映させるために、整備を行う際は住民参加会議「羽根木わくわく会議」を実施するという政策が行われている。この会議で、安全・安心の視点を考慮した羽根木公園再整備基本計画を策定した。平成17年度から平成20年度にかけてワークショップやアンケート調査を実施し、詳細な整備内容を作成し、羽根木公園のいいところを大切にしながら、より魅力ある公園に姿を変えていく政策を住民が主体となって取り組んでいる。

　　　　このように、羽根木公園ではスポーツを通し住民の健康づくりや、図書館などの公共施設や毎年開催されている「梅まつり」で公園周辺の商店街など公園内外とのつながりができることで地域の活性化、さらに経済効果をもたらしているのではないかと考える。羽根木公園には様々な魅力があるが、なかでも羽根木プレーパークは日本で初めての常設の冒険遊び場であり、羽根木公園の一番の魅力ではないかと考える。

**羽根木プレーパーク**

羽根木プレーパークは住民グループの運動により、1979年に開園された日本初のプレーパークである。住民が主体となっている「羽根木プレーパークの会」が行政やボランティア協会などと連携して管理・運営をしている。なかでも「世話人会」は月1回手入れ会を開催し、プレーパークのイベントや今後の運営などについて議論が行われている。プレーパークでは「自分の責任で自由に遊ぶ」というテーマがあり、子どもが自由に遊べる空間であり、遊具は手作りのものや自然のもので、誰でも自由に参加できるがプレーリーダーあるいは大人が絶対にいて、子どもたちが自由に遊べるが安全面も考えられている遊び場である。

　　　　最近、公園ではキャッチボールなどの球技が禁止されていたり様々な制限があるが、羽根木プレーパークでは、プレーリーダーのもと普通の公園ではなかなかすることができない焚き火や泥遊び、木登り、秘密基地づくりなど子どもたちが自ら遊びを工夫する場になっている。自然と触れ合いながら自由に遊ぶ中で、子どもたちが自らの限界と可能性に挑戦し、自然環境についても学ぶという空間になっているのではないだろうか。

　　　　また、羽根木プレーパークは住民からの呼びかけで始まり、住民が積極的に参加しており、公園内だけに限らないコミュニティを多方面から構築することで、活動の中から新たな交流が生まれ、さらに地域コミュニティが発展していくと考えられる。

羽根木プレーパークの様子

参考文献：世田谷区・ＮＰＯ法人プレーパークせたがや

さらに最近では、羽根木公園に限らず住民参加による都市公園事業として公園の整備を行っている公園が多く存在する。森づくりとして個人・団体・企業・学校などが参加して苗木植樹活動を実施されている。この政策は地球環境問題への取り組みとともに、苗木植樹活動を行うことで公園に対する愛着を育むことができ、市民同士の交流が生まれ地域活性化につながる政策ではないかと考える。また、公園の自然を活かし自然教室も実施しており、環境についての講話、ドングリやサクラの枝など自然なものを使用してペンダントやキーホルダーなどのクラフト作り、「森のネイチャーゲーム」・「自然観察クイズラリー」などの自然観察およびクイズラリー実施し、遊びながら環境について学ぶ場としての政策も推進されている。この3つの自然教室を通して子どもたちに自然の大切さを教えることで公園は教育の場としても役割を担っているのではないだろうか。

　このように都市公園の政策としては市民が主体となって苗木植樹活動や、公園の自然や施設などを活かして教育の場として公園を活かすような政策が多く実施されているのがわかる。

**福岡市の公園の事例**

**事例１　田村中央公園**

　　　　田村中央公園は4回にわたりワークショップを行っている。まず、周囲の状況を確認して公園に何が足りないのか、安全面など、どのような公園にしたいかアイディアを出し合った。通学路である北側の道路を安全に歩けるように公園側にスペースをとったり、遊具は人の集まりやすい北東側、南側の住宅地にうるさくないようにスペースをとるなどのアイディアが採用されている。また、水路は管理面から再度検討を行うことになっている。

　　　　このワークショップで路上駐車が多いという現状に対して、子どもの安全を考え飛び出し防止柵を公園周辺に設置したり、街灯は夜も暗がりができないように配置を考えるなど、利用しているからこそ分かる問題点や要望などが改善された。さらに、市民の憩いの場がほしいという要望に対して、だんだん広場というものを作り、その中に花壇を設置して市民も使用できるようになっている。田村中央公園のコンセプトとしてたくさんの人に愛され、利用される公園にということで幅広い年代に利用されたいという想いが強く感じられる。そこで、遊具やグランドなど子どものことばかりでなく外周園路を設け散歩やジョギングも楽しめるようになっている。

図2　田村中央公園のワークショップに参加した年代の割合

（田村中央公園ワークショップニュースのアンケート結果より　グラフ作成）

　参加した人々を年代別に見ていくと、ほとんどが60代以上ということが分かる。公園で遊ぶ年代である10代は、参加している人々の1割程度である。これでは、公園を最も利用すると考えられる子どもの意見は反映されず、大人の意見で公園が整備されていき、意見

に偏りが出てくるのではないだろうか。

（参考文献：福岡市　公園整備）

**事例２　三宅中央公園**

　　　　三宅中央公園も合計4回のワークショップを行っている。まず、公園の役割とは何かということを学び、周辺の公園がどのような使われ方をしているのかを知り、公園の現状を知ることからワークショップははじまっている。子どもたちにとっても安全な公園にするために植栽を低いものにしたり、敷地境界沿いは飛び出し防止柵を設置して横断部を制限し、照明灯の位置についても従来は樹木で隠れている場所もあったが樹木で隠れないところに設置をするなどの意見が採用された。また、老朽化した東屋はベンチや公園名盤に再利用され、暗かったトイレも多目的トイレなどが設置された。幅広い年代に利用してもらうために周回園路を整備し距離表示盤もたてて散歩やジョギングがしやすくなった。さらに、公園を憩いの場にしたいという意見もワークショップで多く出たため、ベンチを多く設け、東屋や縁台も設置することにした。遊具・砂場エリア、多目的広場、芝生広場、距離表示が設置された園路など、それぞれの目的別に使い分けができ、市民の声も多く取り入れられている。どの世代の方にも楽しんでもらえる公園となった。

　　　　また、三宅中央公園は愛護会をつくり月１回以上の公園の除草・清掃・調査点検・ 公園の花壇の手入れ、水やり・ 公園の利用者に対する、利用上の注意・指導などを地域の方々を中心に公園の管理を行っている。

　　　**→**　　　

車道に面した所は飛び出し防止柵が設置されている

図3　三宅中央公園のワークショップによって改善された例

(参考：福岡市　公園の管理計画)

二つのワークショップの事例をみると、飛び出し防止柵を設置するなど子どもたちの安全性を確保することと、周回園路を整備するなど健康を維持するために公園を利用したり、憩いの場にするために花壇を設置するなどが重視されているように思う。

　以上のように、時代の変化とともに従来は子どもの遊び場で自然を確保するところだった公園が、親にとっては子どもたちだけで遊ばせるには不安な場所となった。逆に高齢者などにとっては健康維持をする場、また、地域全体の人々で花壇で花を育て、近所の人々との交流の場、憩いの場として変化してきている。ワークショップを通して意見を交わすことで、市民の要望を取り入れた公園に再整備され、市民活動の取り組み・ユニバーサルデザインの取り入れなどの政策が強化されていることがうかがえる。このように、ワークショップを行うことで様々なメリットもあるが、市民主体でなくても行政が主導で公園づくりをすることも可能である。では、なぜ市民参加にする必要があるのだろうか。

**2－3　なぜワークショップ（市民参加）による公園政策は必要なのか**

　なぜワークショップが必要なのかということに対して、次のようなことが考えられる。一番大きな必要性としては、ワークショップを行うことで政策の計画に参加することができ、地域、市民のニーズが反映しやすくなり、多様な市民の声が生かされる条件が高くなるということである。今まで、公園というものは子どもの親にとって遊びの空間だったはずなのに子どもの親にとって不安や不満の場所になっており、それは利用する人だからこそ分かることではないかと思う。市民の声が反映されることで不安や不満が解消されると共に、よりよい公園づくりが可能となる。

また、人と人、人と自然などの交流が生まれ、希薄化している地域交流に新たな交流を生み出す機会にもなりうる。ワークショップで意見を出し合うことで一人では決して思いつかなかったアイデアが出てきたり、自分だけだと抜けられなかったところから大きく踏み出せたり、グループの相互作用の中で良い意見が出てくる。さらに、地域特性を生かした個性ある公園づくりが創造されやすくなる。参加することで市民は、自分たちで作った公園だという誇りと愛着を抱きやすくなる。馴染み深いものとなって多く利用されるようになり、維持管理上の担い手となる愛護会づくりも期待できる。

　しかし、限界や課題点も考えられる。ワークショップは自主参加のため全住民の声を取り入れることはできず、参加する年代にもばらつきが生じる。事例で挙げた三宅中央公園も田村中央公園においても、60歳などの高齢者の参加者が多く、10代の参加者が少ないということがうかがえる。また、参加したからと言って必ずしも良いデザインや計画はできないということである。まず、何を持って、誰にとって良い計画なのかということもあるだろう。そのことを決めるために話し合いを重ね、多くの人々の意見も必要になってくるのではないだろうか。さらに、公園を再整備する時にビオトープ池などの今日的な提案がなされたのに維持・管理上の問題で実現しなかったという公園も存在する。このように、維持・管理という問題が一番大きいのではないかと感じる。しかし、羽根木公園のプレーパークのように住民の要求が行政を突き動かすようになる可能性も今後あると思う。

　ワークショップは自分が参加することで今までの不安などを地域の人々と共有し、公園自体を見直すことができ、なおかつ、現在、希薄化しつつある地域交流に対して、新たな交流をもたらし、公園に愛着も持てるようになる。ワークショップの参加をきっかけに地域コミュニティへの積極的参加が期待される。しかし、維持や管理の問題は避けられないものであり、また、ワークショップという定期的な集まりがなくなった後に地域における人的交流をどのように促すのかということも課題になってくると思う。

（参考文献：ワークショップ:新しい学びと創造の場）

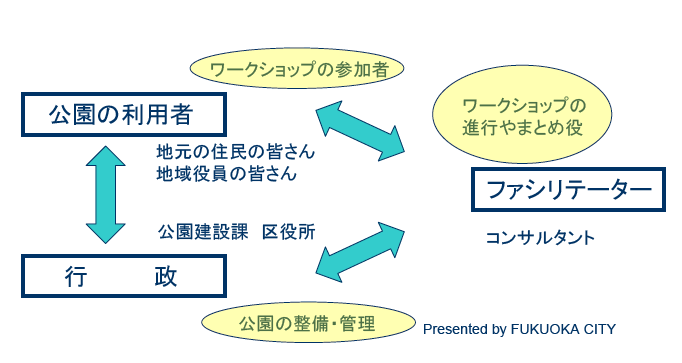


図４　基本的なワークショップの仕組み

（出典：福岡市　公園づくりワークショップ）

この仕組みの場合、公園の利用者はただワークショップに参加して、行政が公園の整備・管理をしている。しかし、公園の整備・管理も住民に委託したりして住民も整備・管理に参加できるようになったら、より愛着がわき、関心も持ってもらえるのではないだろうか。

今後の課題としてどのようなことが政策として求められているのか。次に、現在、国土交通省が挙げている政策課題とともに、新たな公園政策の提案をしていこうと思う。

**3章　公園政策**

**3-1　公園政策の課題**

国土交通省によると政策課題として、①都市再生への対応**：**ゆとりとうるおいに欠ける市街地、災害に脆弱な都市構造の改善等都市を再生していくことに重点を移すことが必要。②地球環境問題等への対応：地球温暖化の防止、ヒートアイランド現象の緩和、生物多様性の保全等に資する都市における緑とオープンスペースの確保は国家的な課題である。③豊かな地域づくりへの対応：地域の資源、文化と一体となる緑とオープンスペースは、地域の活性化、観光、地域間の交流・連携のための資源として大きな役割を果たす。④参画社会への対応：緑とオープンスペースの保全、創出、管理のそれぞれの段階で、地域住民やNPO等の参画による協働のための場つくり、仕組みづくりが必要である。以上の４つを課題としてあげている。その中で、どの公園緑地政策を重視するかということも課題であるようだ。（参考：国土交通省　政策課題）

私はその中でも④参画社会への対応に力を入れていくべきではないかと考える。参画社会への対応で市民活動の取り組みを重視することで、市民参加の植樹活動、ワークショップにより地球環境問題等への対応にもつながり、市民が参加することで公園に愛着がわくため、豊かな地域づくりへの対応にも積極的に参加するのではないだろうか。市民活動の取り組みを重視することで、全ての政策にもつながってくるのではないかと思う。市民活動の取り組みとしてワークショップを具体例として見てきたが、具体例からも分かるようにワークショップに参加する年齢に偏りがある。年齢層に偏りがあるということは意見にも偏りが出てきてしまう。いかに幅広い年代に参加してもらうのかということも課題となってくる。また、お年寄りでも小さな子供でも，様々なハンディキャップを持っている人であっても、どんな人でもより安全で安心して利用できるような公園が求められてくると思う。公園は子どもだけではなく幅広い年齢の人々が利用する場なので、今後、都市公園において「遊び場」という空間だけではなく、地域の人々がコミュニケーションをとる場・日常生活のストレスを解消する場・ユニバーサルデザインなどの取り入れがさらに求められてくると考える。

いまや、公園内を整備するだけではなく公園を活用する政策になってきており、一定の成果があがっていることがうかがえるが、今後この政策の成果や政策の仕組みを次世代に継承できる仕組みを構築する必要があり、また課題でもないだろうか。このように公園政策にはまだまだ課題がある中で、今後の公園政策に求められることは一体どういうものなのか。

**3-2　今後の公園政策の提案**

課題からも分かるように、今後の公園政策は「市民の参加」つまり「市民が公園をつくる」ということがキーワードになってくるのではないかと考える。

現在、ただ、木があり、いくつかの遊具が存在するだけの公園はなかなか使用されにくくなってきている。その地域に住んでいる住民の年齢層や特色を知ることで、地域にあった公園づくり、住民のニーズにあった公園づくりができるのではないだろうか。住民のニーズに合った公園づくりをするためには、課題でもあったように市民活動の取り組みの政策を強化し、ワークショップを政策として取り入れる必要があると思う。

しかし、地域の交流自体が希薄化している現在、自主的に参加するワークショップに大勢の人々が参加するのは困難なことかもしれない。では、どうすれば公園づくりに関心を持ってもらえるのだろうか。公園周辺には多くの場合、学校が存在するため、例えば生徒たちに事前にアンケートをとったり、意見交換をしてもらえると、その意見も公園づくりに反映できるのではないか。また、植樹などの活動において学校に呼び掛けることで、若い世代にも公園はただ遊ぶところではなくて、自分たちで創り上げているという意識が持てるのではないか。子どもが公園づくりに参加することで親たちも少なからず関心を持つはずだ。公園づくりにおいて学校と連携し、学校でワークショップを行ってもらうことで子どもたちがどういう公園にしたいのか、実際に公園を利用する子どもたちのニーズが把握できる。頻繁に公園を利用している人から意見を聞かないと公園づくりは発展しない。

具体例の田村中央公園の図2を見て分かるようにワークショップの参加者は60代以上が7割程度を占めており、10代20代はほとんど参加していない。学校に協力してもらうことで、若い世代の意見、ニーズも把握でき、学校から地域住民へと公園づくりに対しての関心を広げられるのではないかと考える。

実際に学校などでワークショップを開き、その意見を公園づくりに活かした例もある。オーストラリアのクイーンズランド州ではクイーンズランド オールアビリティズ プレイグラウンド プロジェクトを実施している。そのプロジェクトで、地元のあらゆる小学校（州立、私立、特別支援教育グループ、特別支援学校を含む）でのスクールワークショップ、子育てグループや教師、親のグループなど特定の対象者に向けて開いたワークショップ、仕上げとして地域のすべての学校で子どもたちのために実施された「マイプレイグラウンドデザイン」：住民からのフィードバックに即してデザイン計画の改良を目指すためのデザインワークショップなどを行った。これらの多様な手法によって、地域の人たちは公園の計画や設計に直接関わった。（参考文献：みーんなの公園プロジェクト　コラムより）

さらに、具体例からも分かるようにワークショップで多くとりあげられることは「安全性」ということである。今の公園は親にとっては子どもだけで遊ばせるには危険で不安な場所になってしまっている。公園にメリットが感じられなくなってきているのではないだろうか。

公園はあって当たり前のもの、行政が安全性などを確保し、運営するものという考え方を見直す必要性があるのかもしれない。三宅中央公園のように飛び出し防止柵などは、実際に自分の子どもたちが飛び出しているのを見て、危険だと感じた親たちがワークショップで意見を出したので設置されたものである。公園を利用しているからこそ感じる部分は多くあると思う。それを行政任せにしていては、公園はもちろん地域自体も良くならない。公園も地域の一部としてとらえられるべきである。これからは、住民も行政任せにせずにワークショップや植樹活動など公園づくりに参加していく必要がある。そのためには、オーストラリアのクイーンズランド州のクイーンズランド オールアビリティズ プレイグラウンド プロジェクトのように多様な方法と機会の提供が欠かせないと考える。

また、公園は人々が集まる絶好の場所でもある。公園の自然を利用した自然教室はいい例だと考える。近年は近所付き合いの希薄化ということもあり、人々の交流が一段と減ってきている。そこで、人々の交流を促進するために赤ちゃん連れのお母さん方をターゲットにしてみてはどうだろうか。公園デビューという言葉があるように、公園では幼い子供を連れてくる母親を多く見かける。子どもが幼いからこそ、階段の段差を低くしてほしいなど、公園をこうしたいという意見もあるだろうし、お母さん同士で子育ての相談もできる。交流も増加するとともに、様々な意見も出ることで、よりよい公園づくりにも繋がるのである。

**まとめ**

これまでみてきたように公園はただ遊びの場だけではなく、自然を活かして憩いの場や教育の場、交流の場など様々な役割があることが分かった。現在は住民が公園に求めているニーズは多様化している。そのためには、今までのように単に自然を保護する政策だけではなく、今後は植樹活動や自然教室を実施したり、ワークショップを政策に取り入れ、住民たちの声を反映させることが求められているのではないか。住民の声を計画に反映させることで、今以上に公園を利用してもらえるようになるのではないだろうか。公園を利用するような政策にすることで、公園再生へ住民参加が促進され、従来、子供のための遊び場というイメージでしかなかった身近な公園が高齢者も訪れたくなるようなものへと変化するのではないかと考える。

しかし、ワークショップや植樹活動などの市民参加を公園政策に取り入れることは課題や限界も多くあることが分かった。維持や管理の問題、ワークショップという定期的な集まりがなくなった後に地域における人的交流をどのように促すのかということも課題である。公園の計画や整備が終わったら、終わりというわけではなく、政策としていかに持続していけるかということも今後の公園政策には必要なことかもしれない。

公園は地域にひとつはあって当たり前のものであり、管理や整備は行政がするというものという考え方は変えていくべきではないだろうか。住民はただ危険だ、子どもたちだけで遊ばせるには安全性が確保されていないと、文句ばかり言うのではなく、自分たちが自ら行動を起こし意見を言うということも必要になってきていると思う。公園を利用する人たちが公園づくりに参加しないで良いものがつくれるわけがない。改善してほしい部分を言える場が必要だからこそ、私はワークショップという意見を交換できる場が今後大きな役割を担うと考える。

しかし、ワークショップや植樹活動は自主的なものなので強制参加をさせるわけにもいかない。公園づくりには少なくとも公園を利用している市民の声が必要だと思う。そこで、学校と連携するというのを政策として取り入れたらどうだろうか。具体例からも分かったように10代と20代の若年層の参加率は他と比べると低い。学校と連携することで、まず若年層の参加者が増える。さらに、幼い子ども連れのお母さんをターゲットにして、幼い子どもがいるからこそ、公園をこうしてほしいという意見はあると思う。同世代の子どもを持つお母さんたちが集まることで、近所付き合いや公園デビューの手助けにもなるのではないか。公園にメリットに感じられなくなっているのならば、自分たちで創り上げていくしかないのである。具体例で出てきた羽根木公園（羽根木プレーパーク）はその先駆けと言え、理想であり、未来にあるべき姿ではないだろうか。

公園には様々な分類があり、役割もそれぞれである。国立公園や自然公園は自然を保護し、観光資源になる。一方、都市公園などは身近にある、より地域に密着したものである。その地域密着というものを活かし市民とともに創り上げていってほしいと考える。都市公園は様々な可能性があると思う。植樹活動やイベントを行ったり、市民花壇をつくることで交流の場にもなり、ワークショップなどで意見を出し合うことで安全で安心の街づくりにもつながる。

ワークショップの具体例で市民花壇や外周の整備、自然教室を実施するなど、公園をもっと利用したくなるような意見も多く出ていた。公園を利用することで人々の交流が増え、自分たちが創り上げたというように愛着を持ってもらえるようになれば、よりよい公園づくりにも、街づくりにつながってくるのではないだろうか。公園を中心に人々の交流などが増えていってほしいと考える。

**参考文献**

1．申龍徹　2004『都市公園政策形成史　協働型社会における緑とオープンスペースの原

点』　法政大学出版局

2．公園・緑地とは？公園の分類

URL: <http://www.pref.iwate.jp/~hp0604/02park/HPpark/kouenryokutinew.htm>

3．公園・緑地とは？公園・緑地の効果

URL: <http://www.pref.iwate.jp/~hp0604/02park/HPpark/kouenryokutinew.htm>

4．国土交通省　公園とみどり　個別施策

URL: <http://www.mlit.go.jp/crd/park/shisaku/ko_shisaku/index.html>

5．世田谷区ホームページ

URL: <http://www.city.setagaya.tokyo.jp/030/d00014645.html>(プレーパーク)

<http://www.city.setagaya.tokyo.jp/030/d00027826.html>　（羽根木公園再整備）

6．NPO法人プレーパーク

URL: <http://www.playpark.jp/toppage.html>

7．福岡市　公園整備　田村中央公園

<URL:http://www.city.fukuoka.lg.jp/jutaku-toshi/koenkensetsu/machi/kouennnoseibi.html>

8．田村中央公園　ワークショップニュース

<URL:http://www.city.fukuoka.lg.jp/data/open/cnt/3/21418/1/no.1.pdf>　(第1回)

<http://www.city.fukuoka.lg.jp/data/open/cnt/3/21418/1/no.2.pdf>　(第2回)

<http://www.city.fukuoka.lg.jp/data/open/cnt/3/21418/1/no.3.pdf>　(第3回)

<http://www.city.fukuoka.lg.jp/data/open/cnt/3/21418/1/no.4.pdf>　(第4回)

9．福岡市　公園管理・計画　三宅中央公園

<URL:http://www.city.fukuoka.lg.jp/jutaku-toshi/koenkensetsu/machi/miyaketyuuoukouen.html>

10．中野民夫　2001『ワークショップ: 新しい学びと創造の場』　岩波書店

11．福岡市　公園づくりワークショップ

URL: <http://www.city.fukuoka.lg.jp/data/open/cnt/3/21418/1/wsver.2.pdf>

12．国土交通省　政策課題

URL: <http://www.mlit.go.jp/crd/park/shisaku/seisaku/index.html>

13.みーんなの公園プロジェクト　コラム　リサ・スタッフォードさん

URL: <http://www.minnanokoen.net/column_special03.html>

上記のURLのアクセス日はすべて2011年12月9日